

1890年における国文学の誕生

——明治期における「文学」概念の形成過程をめぐる国民国家論(4)——

The Birth of Japanese National Literature in 1890

——A Study of “National Literature” in Japan as a “Nation State” (4) ——

大本達也*

Tatsuya OMOTO

Abstract

It was in 1890 that the first book about the history of Japanese literature was published. *The history of Japanese Literature* was written by MIKAMI Sanji and KOUZU Kuwasaburo, who had studied in the Japanese Study Course at the Imperial University. This paper aims to clarify the process of making this book. In the first chapter, therefore, I mention the foundation of the Imperial University, and in the second chapter, I interpret the characteristics of the book.

キーワード：国民国家，国文学，国語，日本文学史，帝国大学，三上参次，高津楯三郎

歴史は国民国家を維持するための機能を果たしている。

西川長夫〔牧原：328〕

序論

本論は、拙論「明治期における『文学』概念の形成過程をめぐる国民国家論 —— 「国語」または《出版語 print-languages》の創造と「小説」の台頭——」（『CANPANA』No.10：2003）を「総論」とした「各論3」にあたる。引用は《 》，出典は〔 〕，大本による注釈は（ ）で括った。なお、引用は、一部旧漢字を常用漢字に改めた。

アイヌ語による《カムイ・ユカラは「日本の古典として認められない」という旨の説明》とともに、旧文部省により《古典》の教科書の申請が却下された、という逸話を藤井貞和が紹介

*本学非常勤講師，近現代日本文学・思想（Japanese Literature in 19–20th Centuries）

している〔藤井：251〕。《「日本の古典というのは古文と漢文と」であること、「古文とは平安時代の言語を中心とする」そのことだ、という説明であった》と言う〔同〕。藤井は《混乱しながら、その場で「好む、好まざるを別にして日本国籍を有している人々が、北海道に住み、日本人として教育を受けてきたからには、文部省は、アイヌの人々の文学に対しても教育行政上の責任があるはずで、アイヌの人々にとっての〈古文〉であり〈古典〉であるところのカムイ・ユカラを、少数民族のそれであるからといって排除してはならないのではないか」と咄嗟に主張した》と言う〔同〕。旧文部省によるこの《古典》の定義は何に由来してるのだろうか。

筆者は、国民国家 (Nation State) としての日本における《古典》= canon 形成システムの解明のための足がかりとして、明治期における国文学の形成過程を辿りたいと考えている。その手始めとして、まず本論では、1890 (明23) 年に『日本文学史』が刊行されるまでの過程を追う。帝国大学出身の三上参次 (1865-1939)、高津^{くわ}三郎 (1864-1921) によって、初の「日本 (国/和) 文学史」として発刊されたこの書は、その緒言で、《本書は実に本邦文学史の嚆矢なり》と高らかに宣言している〔三上・高津：緒言9〕。第1章で帝国大学における『日本文学史』の成立過程をたどり、第2章で『日本文学史』の言説を検証していく。

1. 『日本文学史』と帝国大学

中山茂は、近代日本における軍閥・軍部を、陸を支配する雄の怪物・ビヒモスになぞらえ、《東京〈帝国〉大学、およびそこから生まれた学閥》を、海を支配する雌の怪物・リヴァイアサンになぞらえている。実際、帝国大学は、《学校体系の頂点に立ち、その出身者が学界のみならず官界、実業界をも支配した》《怪物》だったのである〔中山：2〕。そこで、まず、その《怪物》= 国家装置の誕生までの過程を追ってみよう。

この《怪物》の胎動は京都で始まる。中山は、《維新の1、2年は、神道・国学派の復古派が時流に乗り、新政府内の公卿勢力と結んで、学制も王朝時代の昔にかえそうとする動き》があった、と指摘している〔同：4-6〕。維新政府により学校掛に任命された平田篤胤 (1776-1843) の養子・平田^{かねたね}鉄胤 (1799-1880)、矢野玄道 (1823-1887) ら、国学派が大学創設計画を起草したのである〔文部：序章2〕。だが、結局東京遷都により、この計画は実現しなかった。

1869 (明2) 年の大学校設置でも、リーダーシップを取ったのは、《儒学主義から国学主義への転換を打ち出した》《復古主義的な平田派の国学者たち》であった、と神野藤昭夫は指摘する〔酒井：14〕。《平田派の流を汲める平田鉄胤、矢野玄道等の鼓吹に依りて》《王政復古の思想的背景としては第1に国学者の国体論を推さざるべからず》という論が《大なる勢力》となった〔東京1932：17〕。それゆえ、大学校設立の趣旨には《神典国典ノ要ハ皇道ヲ尊ミ国体ヲ弁スルニアリ乃チ皇国ノ目的学者ノ先務ト謂フヘシ》と明記されたのである〔同：18〕。結

果、大学校の教官は、平田鉄胤や小中村^{きよのり}清矩（1821-1895）らをはじめとした平田派国学者が中心となった〔同：94-96〕。

大学校は、復興された昌平学校（旧昌平黌）、開成学校（旧洋学調所、開成所）、医学校（旧医学所）を合併して作られた。大学校では、旧開成所と旧医学所は《大学分局として位置づけられ》、《神道国教化の運動を反映して、漢学中心の学校から、国学中心の学校へと方針の変換が図られ》た上で、旧昌平黌が本校とされた〔酒井：14-5〕。結果的に国学派の後塵をしいた漢学派は《抵抗を感じつつも、皇漢学の名の下に国学系をも昌平学校の中に取りこみ、そこを核として文教界を牛耳ろうとした》のである〔中山：6〕。

このように、大学校には、当初から国学派と漢学派の主導権争いがあり、開校するやいなや両者の間に抗争が生じた。国学派が《優位性を表象》するために、《300年儒教の牙城たる聖堂に於いて学神祭》を挙行し、孔子に代えて八心思兼命を祭ったためである〔出口：55〕。

国学者漢学者は相並びて教職に居たれど、両派の学者は依然自己の立場を守り、国学者は儒学者を排し、之と相並ぶを好まず、儒学者は徳川時代を通じて官学たる位置にありし儒学を奉ずるの故を以て、国学者の下風に立つことを^{いきぎよ}屑しとせず、両派の間に何等かの確執の生ぜずしては止み難き形勢にありき。〔東京1932：48〕

この抗争の間、《洋学派は、両者いずれにも与せず、傍観的な立場を貫いてい》た〔酒井：15〕。

1870（明3）年、大学校は大学と改称され、大学校本校は大学本校に、開成学校は大学南校に、医学校は大学東校となった。しかし、大学が開講すると即座に、《国学派、漢学派が結束して洋学派に当》るという形で再度紛糾した〔出口：58〕。このため、ついに、同年、学制改正により大学本校は閉鎖され、行政機能のみの文部省に改変される。その一方、《洋学派は別世界で、かえってこの自壊の余燼の中から、分校であった大学南校・大学東校が発展してゆく》ことになる〔出口：59〕。このように、《大学本校が閉鎖されて初めて、欧米の学校制度にならった教育計画が軌道に乗るようにな》り、洋学派を中心として大学は成長してゆくのである〔同：58〕。

1877（明10）年、大学は東京大学となる。大学南校が法学部・理学部に、大学東校が医学部となり、そこに文学部が新設されて、法・理・医、文学部からなる総合大学となった。文学部は当初、史学哲学及政治学科と和漢文学科から成っていた。和文学の教官は大学校、大学時代と同様、小中村ら《国学の掉尾を飾る碩学達》だった〔東京1942：209〕。このようにして、国学派は大学に復帰したが、大学内部におけるその《地位は、もののみごとに淪落して》おり、《近代の学としての主流からはじき出されて》しまっていた〔酒井：17〕。すなわち、《洋学尊重国学凋落の時勢の中に在つて、国学の命脈》が、かろうじて継がれたに過ぎない状況だったのである〔東京1942：209〕。

同年、法文理3学部総理・加藤弘之（1836-1916）が文部省に出した伺書は、一種の悲壯感を帯びている。

今文学部中特ニ和漢文ノ一科ヲ加フル所以ハ目今ノ勢斯文幾ント寥々晨星ノ如ク今之ヲ大学ノ科目中ニ置カサレハ到底永久維持スヘカラサルノミナラス自ラ日本学士ト称スル者ノ唯リ英文ニノミ通シテ国文ニ茫乎タルアラハ真ニ文運ノ精英ヲ収ム可カラサレハナリ但シ和漢文ノミニテハ固陋ニ失スルヲ免レサルノ憂アレハ並ニ英文哲学西洋歴史ヲ兼学セシメテ以テ有用ノ人材ヲ育セント欲ス〔東京1932：473〕

このように、当時は、多くの学生が《日新の学術に向い、東洋固有の文化の研究》をないがしろにしており、和漢学派を保護しなければ、和漢学に従事するものが年々少なくなるといった状況だったため、加藤は《本学部に和漢文章科を設け》、その《命脈を維持》しようとしたのである〔同：686〕。

ところで、この年、三上は中学に入学している。当時の中学では、《歴史はパーレーの万国史、地理はミッチェルの地理書、数学はウイルソンの数学書》というように、たいていの教科書が英語の原書であった〔三上：3〕。まるで《語学を教えるのであるか、地理や歴史を教えるのかよく分からなかった》というような状況だった〔同：4〕。けれども、その一方で、学校帰りには毎日、《漢学の出来る先生の所へ通って》いたのである〔同：2〕。

1881（明14）年、2月に東京へ出ると、三上は進学舎で漢学及び英学を学んだ。英学は、東京大学の4年であった逍遙こと坪内雄蔵（1859-1935）や高田早苗（1960-1938）らに学んだ〔同：8-9〕。当時受けた教育について、三上は《我々はそういう風に亜米利加の生徒として教えられた訳である。ただ小学校の時に余暇に漢学の先生に通ったから、外史とか論語とか漢文を読んだという訳である》と回想している〔同：3〕。同年9月、三上は、高津とともに、東京大学予備門（後の一高）に入学する。予備門は法・文・理合同で、《すべてが亜米利加の教育の引継ぎで、英語の教科書ばかり、数学等もボードの前に立って、皆英語で説明するという風で、先生も英語で講義する人もあった》〔三上：11〕という。

1885（明18）年に、三上、高津は東京大学文学部に入学する。この年、和文学科と漢文学科が分離される。三上は《日本歴史をやろう》と和文学科に入るが、入学者は高津との2人のみであった〔同：24〕。大学においても《外国人の教師が割合に多かったので、先ず文科の講義は大体七分通り英語の講義で》あり、《平常の話にも英語を交えて話すことが多かった》らしい〔同：30〕。外山正一（1848-1900）ら、日本人でも英語で講義をする人がかなりいた、と言う〔同：37〕。このように、三上らは、和文学科の中で、国学のみならず、洋学の影響の強い教育を受けたのである。このようにして、加藤の意図どおり、《英文》のみならず《国文》にも通じた人材が生まれつつあった。

《漢学から英学に進むこと、もしくは漢学と英学を同時に学ぶことは、幕末から維新にかけて生まれた世代が高等教育を受けるコースとなっていた》と鈴木貞美は述べている〔鈴木1998：170〕。そして、洋学中心の世情の中で明治10年代を通じて、再び《漢学が勢いを盛り返してゆく》が、それを決定的にしたのは、1879（明12）年における《「忠君愛国」を柱とする》《儒教倫理による国民教化の方針》に立つ教学聖旨だったのではないかと鈴木は指摘している〔同〕。また、その《漢学ブーム》と平行して《日本主義》が台頭する、と三上は回想している。

明治14、5年の頃には文部省の空気はあまり西洋式ではなく、日本の教育は日本主義でなければならぬというので、明治14年に小学校の教則が改まって〈小学校教則綱領〉、初めて日本歴史を小学校で用いることになり、教員心得の中には忠君愛国というような意味のことが用いられる様になったので、明治天皇が前の文部卿に言って置かれたことが実現して満足であるというようなことをおっしゃったことがあった。〔三上：30〕

西川長夫は、こういう傾向を《日本回帰》と呼び、《日本回帰という現象は、わが国の思想史を理解する上で最も重要なテーマのひとつ》であり、《明治維新後に限っても、欧化主義と日本回帰の相剋と緊張関係が、前者の優越する欧化の時代と後者の優越する回帰の時代として交互に現れ、その時代の支配的なイデオロギーを強く規定してきた》と述べる〔西川1998：164〕。そして、《明治初年から鹿鳴館に至る十数年》は《欧化の時代》であり、《反動としてのナショナリズムと日本回帰を伴った》と指摘する〔同〕。この指摘は、三上の回想と一致するだろう。明治10年代を境に、日本回帰の動きが顕著となるのである。

1882（明15）年、こういった日本回帰の流れのひとつとして、加藤の建議により、東京大学に甲課（国書課）・乙課（漢書課）から成る古典講習科が設置された。その理由を三上は、《古老碩学は凋落してしまい、大学で研究している者達が専門家になるというのは前途遼遠で、それまでに種切れになってしま》って困るからだった、と述べている〔三上：31〕。けれども、学内では、外山のように古典講習科の設立に反対する洋学者の勢力が強く、古典講習科の学生は《図書館にでも行って本でも読んでおれという有様だった》と三上は回想している〔同〕。

小中村は設立時の演説で、古典講習科は《現今国学者は先輩の者が多く若い人は之を学ぶ者もありませぬから今の内其学者を仕立つて置かぬと終には種切れになるだろうとの趣意からして建てられ》た、と述べている〔東京1932：732〕。鈴木は、加藤の建議について、《文献的な基礎からしっかり身につけた古典学者の養成を目的にし》たもので、《日本の「伝統」を建て直そうとする機運の端的な表れ》であり、やはり教学聖旨を受けて出されたものではないかと推測している〔鈴木1998：182〕。高木市之助も《条約改正にからむ欧化主義に対立する民族主義的国粹思想のあらわれ》であると述べている〔高木：8〕。

当時を知る三上は、次のように回想する。

明治15年から古典講習科が出来たのでありますけれども、それはごく一部分の人が養成せられるだけのことであって、大多数の大学の学生は西洋の学問ばかりやって日本のことは知らない。しかしその頃の学生は、まだ小学に行く傍ら、あるいは小学校に入る前に、各家庭で国学・漢学の方をやっておりましたから宜しかったのですが、それから少し後の学生は、ほとんど和漢学の素養がなくて、西洋学を専らやるという本末転倒した年代が相当長く続いたのであります。〔三上：49〕

古典講習科の設置は、《本末転倒した》状況から脱却するためだったのであり、《民族の文明〈文化〉の「伝統」を国民が誇りとすべきものの中核に据え、国民の文化的アイデンティティーを教育をとおして広く形成するために欠くべからざる基礎づくりを行おうとするものだった》のである〔鈴木1998：182〕。なお、古典講習科は1882（明15）年、1884年の2期のみ募集され、最後の卒業生を送り出した1888（明21）年に廃止される。高木は、設立当初から一時的施設であり、《当時漸く普及し始めた新学制の恩恵を得られなかった好学の青年層を救う臨時的措置だった》のではないかと見ている〔高木：8〕。一方、神野藤は帝国大学の設置に連動していたのだらうと推測している〔酒井：20〕。

1886（明19）年、帝国大学令により東京大学が廃され、法文理工医の5学部体制で帝国大学が開設される。この時期の和文学科は、《国語学国文学と国史学等とが領域的に区別されず、近世以来の国学の学風をそのまま継承した時期》であった〔東京1942：207〕。この年、教科書検定制度も始まるのだが、この時期は《日本社会の近代化への離陸期》だった、と中山は指摘している〔中山：24〕。それは、内閣制度の確立（1885）や文官試験の規則公布（1887）、大日本帝国憲法制定（1889）、帝国議会開設（1890）など、この時期に発足した、経済、政治、教育、その他の諸制度には、戦前の日本を支配し続けたものが多かったからである、と中山は言う〔同〕。帝国大学設置もそういった制度＝国家装置のひとつであり、1889（明22）年の学校令によって、学校制度はほぼ整備される。この年、三上、高津は東京帝国大学を卒業し、三上は大学院に進学する。同年、和文学科は、国文学科に改称される。

1890（明23）年、三上は帝国大学の編年史編纂掛・編纂助手となり、高津は一高教授となる。そして、教育勅語の出されたこの年、古典講習科出身の落合直文（1861-1903）が補助として参加し、『日本文学史』が発刊されるのである。落合は《予や、我国に文学史のあらざるを憂へ、こを編述せんと思ひたり。おりしも、三上高津の両兄にあいしに、はやくその挙あるよしを語られぬ。そをききたる予のよろこびいかならん》と、文学史の不在を嘆き、その発刊を喜んでいる〔三上・高津（下）：541〕。

2. 『日本文学史』と国文学

『日本文学史』はどのような目的で発刊されたのだろうか。鈴木は《文部省が方針を改め、教科書の編纂刊行が民間に移ったことに伴う出版だった》〔鈴木1998：220〕と指摘している。三上自身も《卒業した10月に、金港堂という書物屋が、どこから聞いてきたのか、私に出版させてくれということでありましたので、一両回の相談の後に出版することにした》〔三上：49〕と述べている。事実、『日本文学史』の緒言では、教科書として用いられることを念頭において編集したこと〔三上・高津：緒言8〕、および教科書に用いる場合の注意点〔同：緒言10-11〕が述べられている。

教育目的という性格上、三上らの『日本文学史』には、国民の啓蒙という姿勢が強く出る。三上らは《他の専門の諸学に於いては、直接に教訓を垂れ、事実を伝へるが、《文学は之を間接になす》のだ、と言う〔同：20〕。そして、《まことの文学の目的》は、《人をして、高尚、優美、又、純潔なる、精神上の快樂を、感ぜしむる間に、道德、宗教、真理、及び美術上の觀念を起さしめ、知らず、識らず、大切なる教訓を受けしめ、要用なる事実を知らしむる》ことにある、と述べる〔同：23-4〕。《真の文学の、盛に行はるる時》には、《国民の精神をして、自から優美ならしめ、高尚ならしめ、又、純潔ならしむ》、と三上らは言うのである〔同：23〕。

こういった性格上、現代の「文学」概念の中心である小説についての評価は低い。《ただ小説のみ偏頗なる發達をなし、世人をして、文学は即ち是小説なりとの考を懐かしむるに至れり》と小説隆盛の現状を批判している〔同：緒言3〕。そして、《近来我国にては、小説盛に行はれて、車夫も之を街頭に^{ひもと}繙くほどなれども、道德を説き、学理を述べ、事実を記したる書は、手にだに触れず》と現状を嘆いてみせる〔同：20-1〕。けれども、《徳道の説、忠孝の教も、正面より直接に人心に注入して、人を感化することは、最も難》しいが、《之を小説に寓し、詩歌に寄する時は、文字を知る者は、之を読み、文字を知らざるものも、之を謳歌》するだろう、と小説の効用を説く〔同：21〕。そうすれば《知らず、識らず、其意味を解得して、間接に、事実を知り、学理を悟り教訓を受》け、《漸次にまことの学問にも志し、道德の説、忠孝の教にも、耳を傾》けることになるだろう、と言うのである〔同〕。

三上らの基本的立場は、小説や詩歌は《美文学》の一種に過ぎず、歴史、哲学、政治学と言った《理文学》が同時に發達しないことには、《文学の正しき進歩》とは言えない、というものであった〔同：緒言3〕。同時代人の鷗外こと森林太郎（1862-1922）は、1889（明22）年の「『文学と自然』ヲ読ム」の中で、《文学》に2大別があるとして、《一ハ美術ノ範圍内ニ在リテ其補完部ヲナセル美文学ニシテ其性ヤ「美」ナリ》と言い、《一ハ美術ト關涉セズシテ独立セル科学文学ニシテ其性ヤ「真」ナリ》と言い、《極美ノ美術》に対すべきは《最真ノ科文学》である、と言っている〔森：458-9〕。同時期に書かれた2つの文章から、当時の文学概念

は学問的著作を含む広義のものが普及していたことがわかる。

三上らは、《徒らの文筆を弄ぶ》著作者や《軽薄浮華なる文章を喜ぶ》読者が多い現状の弊害を矯正することが《極めて急務なるを感じ》、《国文学の講習を教育界に導き》、「文学」が《玩弄具》でないこと、そして、小説・詩歌が「文学」の全体ではないことを示すためにこの本を書いた、と説明している〔三上・高津（上）：緒言3-4〕。

今、余輩が、此文学史を著して、本邦文学の光輝を発揚し、以て右に云へる効果を奏せん事を冀ふは、特に今日に於ては、甚だ必要のことと信ず。蓋し文学史は、国民をして、自国を愛慕する観念を深からしむる……〔同：6〕

三上らは、《美文学》のみの発展に警鐘を鳴らし、《理文学》の発展を目指す意図で『日本文学史』を編んだのである。

ところで、第1章で見てきたように、日本初のこの文学史は、帝国大学において、国学と洋学、双方の影響下で生まれた。両者はどのように結びつけられたのであろうか。

『日本文学史』における洋学の影響は明らかである。その緒言には、《本書の体裁は、西洋各国にある文学史と、文学書との体裁を参考して、之を折衷斟酌したるものなり》とある〔同：緒言6〕。三上、高津の2人は、大学生のときから、《仏蘭西のテインの文学史》を参考に、日本文学史が編めないかと話し合っていた〔三上：49〕。

著者2人曾て大学に在りし時、常に西洋の文学書を繙きて、其編纂法の宜しきを得たるを嘆賞し、また文学史といふ者ありて、文学の発達を詳かにせるを觀、之を研究する順序の、よく整ひたるを喜びき。〔同：緒言1〕

《仏蘭西のテインの文学史》とはイッポリット＝テーヌ（Hippolyte Taine 1828-1893）による『英文学史』*Histoire de la littérature anglaise*（1864）のことである。鈴木は、この英文学史について《人種、時代、環境〈自然と社会〉の3大要素を組みあわせて典型的な作家の才能を論じ、精神史を叙述するものである》〔鈴木1998：220〕と解説している。

さて、次に国学の影響だが、単純に三上らを国学派とは言えないだろう。漢学者との争いにおいて、《殊に平田篤胤等の出づるに及びて、其極端に奔り、遂に詬罵を逞しうし、讒誣を加ふるに至りしは、甚だ惜むべき事なり》、と三上らが述べてることからもわかる〔三上・高津（下）：324〕。それでも、移入された文学史には、国学によって蓄積された知識が注ぎ込まれたわけであり、その蓄積なくしては『日本文学史』の執筆は不可能だった。

洋学由来の文学史という枠組みに、国学の遺産を注ぎ込むことによって作られた『日本文学史』が、新たに生み出したイデオロギー装置は国（民）文学（National literature）である。三

上らは《邦国によりて、其固有の特質を具ふる文学を指して、其国^{ナショナル・リテラチャー}文学といふなり》〔三上・高津（上）：25-26〕と述べる。帝国大学において、三上らが目指したのは国文学の確立だったと言えるだろう。

鈴木が指摘するように、ドイツに始まった《“Nationalliteratur”〈国民文学〉という観念》は《1770年代から広く用いられるようにな》って、《フランス、イタリアなどにもまたたく間に広がり、この《各国の「文学」という考え方、「ひとつの民族」は「ひとつの文学」をもつという観念は、社会や文化、そしておそらくは政治にまで重要な役割を果たすことになってゆく》のである〔鈴木1998：51〕。

19世紀の文化ナショナリズムの動向については、自国の文化的伝統の形成とは別に、「国民文学」という概念の変容にふれておく必要があるだろう。この観念は、その国の言葉で書かれた、その国を代表する「文学」作品を一種の聖典〈canon, キャノン〉のような崇拜の対象にしてゆく。同時にそれは、文化的な向上をはたした民衆の多くが愛好するものという意味を付け加えてゆく。〔同：59〕

国家装置たる帝国大学において、国文学というイデオロギー装置が移入されたことは、国家装置のモジュール（module）性を示す。西川は、《国民国家の特色の一つは、相互模倣性ということである》と指摘する〔西川1998：38-9〕。

あらゆる国家はそれが国民国家である限り、国境という限られた境界線のなかで、鉄道その他の交通網をもち、統一された貨幣や度量衡をもち、租税制度をもち、単一の市場と経済制度をもち、可能であれば植民地をつくろうとする。どこの国も同じように憲法や議会、中央集権的な政府、警察や軍隊をもち、戸籍や家族制度があり、学校や博物館があり、国民史や神話があり、記念碑や国旗や国歌がある〔同〕。

このような相互模倣性を可能にしているのが、《国家の諸制度を全体から切り離し組み入れることができる》《国家装置のモジュール性》である〔同〕。このモジュール性ゆえに、それぞれの国民国家が、それぞれの歴史、文学史を生み出すのである。

桂島宣弘は、一国史の記述が可能になるための前提を3つ挙げている〔西川・渡辺：103〕。第1に、《明確に区切られた境界領域》が存在すること、第2に《太古から継続的に連続する、それ自体で完結する特性を備えた、国民（民族）を構成要素とする歴史共同体（国家）が存在》すること、そして第3に《その歴史共同体が育んできた文字によって記述されてきた史料》が存在することである。《一国の文学といふものは、一国民が其国語によりて、その特有の思想、感情、想像を書きあらはしたる者なりと云ふべきなり》〔三上・高津（上）：29〕とい

う三上らの国文学の定義は、この3つの前提を完全に含んでいる。

桂島の言う第3の前提である国語の絶対性は、必然的に漢文テキストの排除を生み出す。三上らも《本書は、本書の総論に述べたる、文学の定義に従ひ、漢文は凡て之を採らず、但し其国文学と関係せるところは、固より之を明かにせり》〔同：緒言11-12〕と述べている。

たとえば、三上らは、奈良朝以前の文として、道後温泉の碑文や十七条憲法、法隆寺の諸仏像の銘を挙げているが、いずれも漢文であるため「文学」には採らない〔同：68〕。そして、《我上古の文学として、みるべき者は、まづ、古事記、及び、日本書紀の中に載せられたる歌謡の類のみ》〔同：74〕と言ひ、日本書紀については、《全篇、皆、漢文なれども、神代以下の歌謡等は、其文字こそ漢字なれ、さすがに之を国音に当て、口誦のままを載せたるものなれば、さてこそ余輩は上代の歌謡、即ち日本文学の種子は、如何なるものなりしかを、知るを得るなれ》〔同：97〕、と歌謡のみ記載し、本文は採らない。古事記に関しては、《拙劣なる漢文》に見えるが、それは《苦心して国語のままを写さんとせし》結果であるとして、本文を3節ほど紹介している〔同：125-126〕。また、平安朝の《歴史体の文学》については、《国史は云ふに及ばず、すべて表立ちたる記録は、皆、漢文のみなりしかば、わが国文学は、唯、文章といひ、体裁といひ、小説に類似したる雑誌あるのみ》、といひ、『栄華物語』『大鏡』『今昔物語』を採っている〔同：338〕。

徳川期のテキストで儒学者の和文を多く採っていることから、『日本文学史』全体を通じて、漢学自体を軽視する姿勢はあまり見られない。けれども、三上らの著作は、「国文学」における「国語」テキストの絶対性という基本理念を、その最初期において提示したのである。

西川は《歴史の中核にはアイデンティティの概念がある》と指摘する〔西川・姜：62〕。この指摘は鋭い。1 国史が成立する第2の前提として《太古から継続的に連続する、それ自体で完結する特性を備えた、国民（民族）を構成要素とする歴史共同体（国家）が存在》すること、と桂島が指摘するように、歴史とはいわば「国民（Nation）の記憶」なのである。そして、その中核に位置する《古典》は、まさに国民国家としての日本のアイデンティティなのである。「愛国心の涵養」などというスローガンとともに、《古典》の重視が訴えられる現代の日本において、旧文部省が藤井に示した《古典》の定義は、まさに国民国家としての歴史認識＝国民的アイデンティティの集中的表現だったのである。

結 論

鈴木は『万葉集』や『源氏物語』は、明治になって、はじめて「文学」になった」と言う〔鈴木1994：7〕。それは、《明治以前には、今日われわれが用いるような意味での「文学」の観念も、それに相当する言葉もなかった》からである〔鈴木1994：7-8〕。徳川期までにおいて《伝統的に「文学」と呼ばれた》のは、《儒学を中心とする学問と漢詩文を中心にした文字

による教育》だった〔鈴木1998：148〕。すなわち、国文学というイデオロギー装置により、『万葉集』や『源氏物語』ははじめて「文学」となったのである。

本論で見てきたように、洋学を中核に発展していった帝国大学における日本回帰の流れの中で、初の『日本文学史』は生まれた。西洋の文学史をモデルにして作られた『日本文学史』は、国文学は国語で書かれるべきだという概念を輸入した。すなわち、国民国家・日本のアイデンティティたる《古典》＝canonを初めて定義したのは、帝国大学という国家装置において成立した国文学というイデオロギー装置なのである。

引用文献

- 酒井敏・原国人編（2000）『森鷗外論集・歴史に聞く』新典社
鈴木貞美（1994）『日本の「文学」を考える』角川書店
——（1998）『日本の「文学」概念』作品社
高木市之助（1967）『国文学50年』岩波書店
三上参次・高津敏三郎（1890）『日本文学史（上・下）』金港堂
三上参次（1991）『明治時代の歴史学界・三上参次懐旧談』吉川弘文館
出口晋（2000）『旧制官立高等教育機関の沿革素描』文芸社
東京帝国大学編（1932）『東京帝国大学50年史（上）』東京帝国大学
——（1942）『東京帝国大学学術大観・総説・文学部』東京帝国大学
中山茂（1978）『帝国大学の誕生』中央公論社
西川長夫（1998）『国民国家論の射程』柏書房
西川長夫・渡辺公三編（1999）『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房
西川長夫・姜尚中・西成彦編（2000）『20世紀をいかに越えるか』平凡社
藤井貞和（2000）『国文学の誕生』三元社
牧原憲夫編（2003）『〈私〉にとっての国民国家論』日本経済評論社
森鷗外（1975）『鷗外全集・第38巻』岩波書店
文部科学省編（1972）『学制100年史』文部科学省 HP
(http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpbz198101/)